

第 51 回日本臨床細胞学会総会

河原 栄*

平成 22 年 5 月 29 日(土)～31 日(月)にパシフィック横浜で開かれた第 51 回日本臨床細胞学会総会に参加した。会長は東京の杏林大学医学部病理学の坂本穆彦先生だが、しばらく東京で学会が続いたので、横浜に移動されたい。本年から全国の大部分の施設で、婦人科細胞診の診断が日母分類の Class 分類からアメリカのベセスダシステムに変わるか、両者併記されるようになった。例えば、旧 Class IIIa の中等度異形成が HSIL として日本の組織分類における上皮内癌と同じ扱いをされることになり、極めて大きい変化である。そのためベセスダ分類に関するシンポジウムが 2 題、ワークショップが 3 題、教育講演が 1 題あった。この分類は HPV 感染とも関連しており、関連する HPV のワクチンに関する市民公開講座など婦人科細胞診は HPV 関連の話で盛り上がっていた。細胞検査士は従来の各自の診断基準を新しいベセスダシステムに沿うように変えていくのか、病理医はベセスダシステムに伴って、組織診断をどのように標準化するかを考えながら、皆真剣に聞いていた。

もう一つの興味あるワークショップは細胞検査士の養成に関して、「これからの細胞検査士教育一多様化するニーズにこたえて」であった。細胞検査士と臨床検査技師のダブルライセンスを目指す 4 年一貫教育は杏林大学の郡先生、神戸常盤大学の布引先生、倉敷芸術科学大学の宮本先生から話があり、本年で 3 年目になる厚労省のがんプロフェSSIONナル事業に関連した大学院での細胞検査士コースについては大阪大学の南雲先生から話があった。病院病理部での細胞検査士教育については少し前まで保健学科で細胞診教育に携わっていた愛知医科大学の横井先生が発表された。どれも重要な話であり、団塊の世代の引退に続いて、若い世代の細胞検査士を増やすためには、いろいろな立場の人がそれぞれ主体的に新しい教育システムを考えるべき時に来ているとの感を新たにした。

私自身は同期間に近くの町田市で開かれた別の学会でもポスター発表をしたので、すべてを聞くことができなかったが、いつもよりも重要な話を聞くことができた学会であったように思う。

*金沢大学医薬保健学域保健学類 検査技術科学専攻 kawahara@kenroku.kanazawa-u.ac.jp